

ハビット論による実体概念の変革 —ジョナサン・エドワーズの哲学と神学

森本 あんり (国際基督教大学)

ジョナサン・エドワーズ (1703-1758) は、ニューイングランド生まれのピューリタン思想家なので、「イギリス」哲学の文脈でその名を聞くことは少ないかもしれない。彼は、草創間もないイエール大学を出て牧師となり、「大覚醒」と呼ばれる信仰復興運動の指導者また分析者となったが、やがて神学論争の末に教会を追われて辺境の先住民寄宿学校へと赴き、晩年は現プリンストン大学の第3代学長となった人物である。20世紀中葉に始まったピューリタン・ルネサンス以来、エドワーズは神学・哲学・文学・倫理学・科学史・社会思想史など、多方面にわたる研究主題を提供してきた。半世紀をかけてイエール大学が刊行してきた彼の批判的校訂版著作集も、全26巻をもって先般ようやく完結を見たところである。

エドワーズは、ペリー・ミラー以来「ロックとニュートンの上に鋳直されたピューリタン」と評されてきた。近世哲学の歴史を振り返ると、プロテスタントはどちらかと言えば認識論の分野の開拓に貢献しており、存在論はもっぱらカトリック神学の勢力分野である。しかし、イギリス植民地時代のハーヴァードやイエールのカリキュラム、またそこで読まれていた大陸の改革派神学などを検証してみると、ピューリタニズムはむしろカトリック就中トマスの伝統的知的遺産に深い敬意を抱いており、そこから多くを学んでいることも明らかになる。初期のエドワーズは、こうしたアリストテレス的・トマスの存在論の光に浴しつつ、存在を「慣性」habit ないし「傾向性」disposition として捉える独自の存在理解を産み出した。それによって彼は、ロックもまだ捨てることができずにいた、偶有性の基体としての「実体」という形而上学的な概念をきっぱりと捨て去っている。その結果、エドワーズの傾向的存在論にあっては、存在と行為、存在と生成、本質と力能、質量とエネルギーとが同一の範疇で語られることになる。少し大げさに言うと、エドワーズはニュートンよりも $E=mc^2$ のアインシュタインと同時代人である、ということになるかもしれない。

初期の論考に見られる彼のこうした自然哲学的な関心は、そのまま後年の神学的思索に連なり、存在の成就としての救済という理解を導くことになるが、エドワーズのハビット論がもっとも異彩を放つのは、それが神の存在の理解にも適用されている点である。神は、純粹現実有という完全飽和状態に静止して蟄居する実体ではなく、不断の行為であり生成であり関係である。神の存在は、すなわち神の行為である。神は、無限の善の傾向性により内在において充溢しているが、その同じ傾向性の発現によって外へと「流出」emanatio し、経綸的行為としての世界創造を結果する。世界の存在は、それゆえ神の傾向性発現の必然的な条件ないし法則性の編み目として理解され、これが世界の継続性・自律性・定常性を保証することになる。外界の存在は、パークリでは神的主観の認知において、ヒュームでは人間主観の連接においてようやく担保されるが、エドワーズではハビットに固有な存在論的地位が認められるため、こうした不可知論的帰結を免れている。これは、後にC・S・パースが論じることになる「構造的存在」とほぼ同義である。

なお本講演は、おおむね以下に執筆した内容を下敷きに行っている。Anri Morimoto, *Jonathan Edwards and the Catholic Vision of Salvation* (Pennsylvania State University Press, 1995), 森本あんり『ジョナサン・エドワーズ研究—アメリカ・ピューリタニズムの存在論と救済論』(創文社、1995年)